

鯨絵から時代の転換を理解する日本史探究授業開発 —小単元「鯨絵から新しい時代の到来を読み解け」を事例に—

クラーク記念国際高等学校 八田 友和

1 実施学年及び教科・領域

高等学校 第2学年 地理歴史科 日本史 B (特設単元)

2 学習のねらいと博物館の活用との関連について

(1) 単元名「鯨絵から新しい時代の到来を読み解け」

(2) ねらい

① 学習指導要領との関連

『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説—地理歴史編—』(以下、『指導要領—地理歴史編—』) 日本史探究の「(3) 近世の国家・社会の展望と画期(歴史の解釈、説明、論述)」において、「産業の発達、飢饉や一揆の発生、幕府政治の動揺と諸藩の動向、学問・思想の展開、庶民の生活と文化などを基に、幕藩体制の変容、近世の庶民の生活と文化の特色、近代化の基盤の形成を理解すること」とある。(下線筆者加筆)

そこで本研究では、下線を踏まえた授業を展開する際、「鯨絵」を教材として取り上げる。鯨絵に込められた、「為政者・民衆の気持ち」や「地震」、「世直し」といったキーワードに着目させ、当時の社会情勢および近世から近代への時代の転換の理解を目指す。

② 単元の目標

○ 主体的に学習に取り組む態度

ア) 江戸時代末期における社会情勢の変化を、幕府や外来勢力が及ぼした影響だけでなく、民衆の視点から主体的に調べることができる。

○ 思考・判断・表現

イ) 当時の社会情勢を、ペリーの来航という外的要因と、一揆・打ちこわしの増加、自然災害の多発といった内的要因に分け、それぞれを関連させたうえで社会情勢を考察することができる。

ウ) 鯨絵に込められた、世直し・為政者への眼差し・地震などのキーワードに着目することで、当時の社会情勢を複数の視点から考察することができる。

○ 知識・技能

エ) 鯨絵が出版された背景や、果たした役割を類推することを通して、江戸時代後期の社会に与えた影響を理解することができる。

(3) 博物館との関連

① 活用方法：非来館型活用

② 活用資料

国立歴史民俗博物館公式サイト内「歴博画像データベース」

- ・【資料番号 H-23-17】 鯰絵 あんしん要石
- ・【資料番号 H-23-19】 鯰絵 大鯰庶民襲撃図
- ・【資料番号 H-23-23】 鯰絵 江戸・信州鯰押込図

国際日本文化研究センター「鯰絵コレクション」

- ・鯰絵「鯰と要石」
- ・鯰絵「太平の御恩沢に」

国立歴史民俗博物館のミュージアムショップで購入した「弁慶なまづ道具」が描かれたポストカード

なお、本実践で活用を予定している鯰絵および資料解説は表1の通りである。なお、(資料1)は、国立歴史民俗博物館のミュージアムショップで購入したポストカードをPDFで読み取り、(資料3・4・5)の画像は、国立歴史民俗博物館の「歴博画像データベース」のものを活用した。(資料2・6)は、国際日本文化研究センターの「鯰絵コレクション」に収録されている画像を活用した。

表1 実践で用いた鯰絵およびその解説

 <p>(資料1) 弁慶なまづ道具</p>	<p>【資料解説】</p> <p>京の五条の橋のたもとに立つ鯰の弁慶。損壊した家屋を再建するための、地ならし用の鉾・柱を立てる大槌・壁を塗るコテなどの大工道具を「七つ道具」ならぬ「なまづ道具」と称して背負っている。鯰(地震)は、江戸の人々に悲惨な損害を与えた一方で、再建景気をもたらすという一面もあった。傾斜気味に描かれた五条橋は、江戸の日本橋(反り橋型)を暗示する。</p> <p>(出典) 国立歴史民俗博物館ホームページ</p> <p>(最終確認 2021年1月24日)</p> <p>https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/rekihaku/90/index.html</p>
 <p>(資料2) 太平の御恩沢に</p>	<p>【資料解説】</p> <p>人々が鯰を殴ったり髭を引っ張ったりしてこらしめているが、一方では、地震で恩恵を受けた職人や瓦売りは鯰をかばっている。鯰の脇には瓢箪が転がり猿が倒れている。これは大津絵における猿が瓢箪で鯰をおさえるという主題を意識したものである。今回の地震は、鯰をおさえる筈の猿が瓢箪の中の酒を飲んで酔ってしまい、その役割を果たせなかったために発生したということになっている。</p> <p>(出典)『鯰絵』第五部 鯰絵総目録 p.268 より引用</p>

 <p>(資料3) 鯰絵 江戸・信州鯰押込図</p>	<p>【資料解説】</p> <p>非常に激しい敵意が表現されているにもかかわらず、その版面に、絵の趣旨とはまったく違った、つまり国土を蹂躪する怪物としてでなく、救済者としての鯰の到来を喜ぶ感情を表した歌がそえられている。(pp.65-66)</p> <p>→ 鯰のもつ破壊と復興、嫌悪と崇拝、殺戮と養育といった顕著な対立を表現している。(p.66)</p> <p>(出典) C. アウエハント 2013 より引用</p>
 <p>(資料4) 鯰絵 大鯰庶民襲撃図</p>	<p>【資料解説】</p> <p>震災後の市中の混乱を描いている。金持ちは、金を使ってしまえば良かったと後悔しており、女郎は早く逃げようと促している。左上では、雷が高見の見物をしており、右下では子鯰を打つ子供を職人の子供が制している。</p> <p>(出典) 『鯰絵』第五部 鯰絵総目録 p.353 より引用</p> <p>ここからも、地震が与える悪影響だけでなく、正の側面があることが窺い知れる。→ 地震のもつ禍福がよく表現されている作品といえる。</p>
 <p>(資料5) 鯰絵 あんしん要石</p>	<p>【資料解説】</p> <p>大きな要石に人々が手を合わせて祈っている。年寄りは長寿を、大工は仕事が増えてこなさきれないので十人前の体を、瀬戸物屋は地震があるときは事前に知らせてくれるように、芸人・吉原の人は地震がないように、医者には忙しすぎるので早く患者が治ってほしいと、各々の思惑を願っている。地震という負の感情だけでなく、正の感情も創出されている。</p> <p>(出典) 宮田・高田 1995 より一部引用 p.265</p>
 <p>(資料6) 鯰と要石</p>	<p>【資料解説】</p> <p>画面上方では、鯰が暴れて町が炎に包まれており、鹿島大明神が早く現場に行って処理しなければならないと慌てている。下方で要石にもたれて眠っているのは、恵比寿であると推察される。この構図は『金々栄華之夢』から援用されている。</p> <p>(出典) 宮田・高田 1995 より一部引用 p.266</p> <p>鯰のもつ破壊と復興、嫌悪と崇拝、殺戮と養育といった顕著な対立を表現していると考えられる。</p> <p>(出典) C. アウエハント 2013 より引用</p>

(筆者作成)

(4) 指導観

鯰絵は、『日本史大事典』において、「一八五五年（安政二）十月の安政地震を契機に、江戸市中に大量

に出回った、鯰の怪物を描いた浮世絵版画。地底の大鯰が地震を引き起こすという民間信仰に基づいて描かれた版画で、一部は地震の護符や守札とされた。しかしその大半は、相次ぐ天災や政治の混迷などによる民衆の欲求不満を風刺やパロディによって一時的に満たすような内容のものが多かった。幕府によって禁じられたにもかかわらず、さまざまな絵がらや文言を持つものが四〇〇種余りも作られ、歌舞伎からも大きな影響を受けていた。鯰絵では、地震鯰は破壊者であると同時に新しい世の中を創造する救済者として描かれている。これは地震そのものが「地新」、つまり新しい世の中の到来であると民衆に想像されていたことと関連している。一見してなにげない鯰絵の表現の裏に、民間信仰に根をもつ民衆の世界観が隠されていることが、オランダの日本学者アウエハント C.Ouwehand (1920-) の研究により明らかにされた。」¹⁾と説明されている。

鯰絵には多くのモチーフがあり、約 200 枚以上が出回ったと言われている。小松和彦氏は『鯰絵－震災と日本文化－』において、安政期に出回った鯰絵のモチーフを 4 つに大別して示している²⁾。

- 1 怪物鯰の活動で生じた地震の惨状を描いたもの。
- 2 地震制圧の神として鹿島大明神を筆頭とする神々や民衆による地震の制圧・鯰退治を描いたもの。
- 3 復興景気で一部の職人たちが大喜びし、怪物鯰に感謝しているもの、あるいはその逆の、地震のために職を失ってしまった人たちの窮状を描いた地震直後の世相を描いたもの。
- 4 金持ちをこらしめたり、新しい世の中を出現させる、いわゆる世直し鯰を描いたもの。

ここから、鯰絵を読み解くことで「地震と鯰の関係」「地震（地新）と世直しの関係」「地震と民衆の関係」などを理解することが目指される。なお、鯰絵のモチーフとしては、1～3 のパターンの絵柄が大多数を占めており、4 つ目のパターンはそれほど多くない。しかし、少数とはいえ、安政の江戸地震において、地震と世直しを積極的に結びつけるようになった背景に、江戸の市民が地震と世直しを両義的にみる（見ざるを得ない）社会状況に追い込まれていたことが容易に想像できる³⁾。これは地震だけでなく、幕藩体制の動揺や外国船の到来など、いくつかの不安定要素に抱く感情を鯰絵が敏感に感じ取った結果といえるのではないだろうか。例えば、C. アウエハントは、著書『鯰絵』において、天災と為政者の関係について言及しており、「天災は、口先だけの為政者による悪政やその弊害に対して、神々が下した罰としたうえで、徳川時代になってもその影響は続き、その片鱗が鯰絵のなかにも見出せる」と述べている⁴⁾。ここからも、天災と為政者の関係に関しての言及がみられる。よって、「鯰絵」を丹念に読み解くことによって、地震・世直し・民衆心理だけでなく、為政者（幕府）による悪政やその弊害を読み取ることが可能になるのではないだろうか。加えて、アウエハントは、「王道」という儒教概念を紹介したうえで、地震の発生理由を、天子が王道を踏みはずして政事を疎かにした際に下される非人道的な「咎」の 1 つのあらわれと紹介している⁵⁾。

以上を踏まえ、複数の視点から鯰絵を読み解いていきたい。なお本研究では、近世から近代における時代の転換の理解を目指した授業開発・実践を心掛けた。

3 指導計画（全 5 時間）

（1）事前学習（1 時間）

過程	時数	○学習活用及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
----	----	-----------	--------------------

事前学習	1	<p>○18世紀末からペリーの来航にかけて、一揆・打ちこわしの増加や欧米勢力の接近など、内憂外患の時代であったことを確認する。</p> <p>○風刺画の読み解きを練習する。 「弁慶なまづ道具（資料1）」の画像を用いて、風刺画を読み解く練習を行う。</p>	<p>■思考・判断・表現</p> <p>■知識・技能</p>
------	---	---	--------------------------------

(2) 「鯨絵」と民衆・世直しについて（1時間）

過程	時間	○学習活動・学習内容、【資料】	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	10分	<p>○ペリーの来航、一揆・打ちこわしの増加など、内憂外患の時代であったことを再確認する。</p> <p>○安政の大地震について資料から読み解きを行う。</p>	□前時の学習内容を確認することで、既有知識の想起を行う。
展開	35分	<p>○鯨絵の読み解きを行う。 （資料2・3・4・5）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鯨と地震の関係について理解する。 ・鯨絵に描かれているものの抽出を行う。 ・描かれているものの共通点と差異を確認する。 ・地震がもたらす禍福について理解する。 <p>○鯨絵を複数提示し、描かれたモチーフを理解する。</p>	<p>□適宜、補助発問を行うことで、学習活動を円滑に進める。</p> <p>■知識・技能</p>
まとめ	5分	<p>○本時のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「地震と世直し」「地震と民衆」についてまとめる。 	□複数の視点にそってまとめるように支援する。

(3) 鯨絵と為政者の関係を考える（1時間）

過程	時間	○学習活用及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	10分	<p>○前時の復習を行う（資料2・3・4・5）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鯨絵とそこに描かれているもの ・鯨絵と世直しについて 	■主体的に学習に取り組む態度
展開	35分	<p>○当時の人は、地震が起きる理由をどこに求めていたか類推する。（答えに代えて、「鯨絵」から読み解く。）</p> <p>○為政者（幕府）が行った当時の政策について説明する。 （幕府に向けられた、視線についても問う）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペリーの来航、祖法であった鎖国の解禁、幕府の武威の失墜など <p>○人々が鯨絵に込めた願い・思いについて考察する。</p>	□為政者と天災の関係について考察することで、自然災害と政治の2つの側面から、当時の民衆の気持ちや思いに迫っていきたい。
まとめ	5分	<p>○本時のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・為政者と地震の関係について整理する。 	■思考・判断・表現

(4) 幕府権威（武威）の失墜と・世直しについて考える（事後学習：1時間）

過程	時数	○学習活用及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
事後学習	1	その後の歴史の流れについて大まかに説明を行う。その際、公武合体運動や尊王攘夷運動の展開、薩長同盟や戊辰戦争を事例に解説を行う。加えて「ええじゃないか」や「おかげまいり」などを紹介することで、庶民がどのように幕末を見つめ、生活をしていたのか解説する。そうすることで、朝廷や幕府といった「上からの歴史」だけでなく、庶民を代表とする「下からの歴史」についても触れることができ、幕末という歴史を庶民・幕府・外国勢力といった視点から多角的に理解できるように工夫を行う。	■主体的に学習する態度 ■思考・判断・表現 ■知識・技能

4、実践の概要（鯨絵を活用した授業）

ここでは、「鯨絵」を活用した時間を中心に、事前学習から事後学習までを整理・提示する。

(1) 事前学習（1時間）

18世紀末から1853年のペリー来航（翌年1854年に日米和親条約を締結）までに、大飢饉や一揆・打ちこわしの激発などの国内的危機および欧米勢力の接近に代表される対外的危機という内憂外患の時代に直面していたことを学習した。

- 天明の大飢饉、浅間山の噴火、大洪水などの自然災害が多発した点
- 自然災害の多発もあり、一揆や打ちこわしが頻発した点
- ペリーの来航やロシアとの交渉に代表される外国勢力の接近が増加した点

以上、3点に注目した事前学習を行った。その際、風刺画の読み解きについても説明を行った。



「弁慶なまづ道具（資料1）」の鯨絵を事例に、風刺画がもつ「象徴、比喻された物や人」「文字や題名に込められた駄洒落や皮肉」などのポイントを提示し、風刺画を見る際の視点についてレクチャーを行った。まず、鯨絵に描かれているものを答えさせた。生徒からは、「鯨、斧、のこぎり、橋、鎧」などの発言があった。その際、生徒から出た「鯨が暴れると地震が起きる」という発言に着目し、「鯨＝地震」として描かれていること、弁慶なまづ道具に込められた駄洒落やユーモアについて説明を行った。

左図が（資料1）。

(2) 「鯨絵」と民衆・世直しについて（1時間）

まず前時の復習を行った。前時で学習したペリーの来航や自然災害の多発、一揆・打ちこわしの頻発を振り返り、内憂外患の時代であったことを再確認した。そして、自然災害の一例として、安政年間に大地震が起きたことを伝え、その概要を下記の資料から読み取った。

安政の大地震とは？

江戸時代後期の安政年間に、日本各地で大地震が多発した。具体的には、1855年に安政江戸地震、1854年に安政東海地震、安政南海地震、飛越地震、安政八戸沖地震、伊賀上野地震などがある。

安政江戸地震は、マグニチュードは7～7.1とされる直下型地震である。おもに江戸を中心に大きな被害が出たもので、地盤の脆弱な江戸（本所、深川、浅草、下谷など）の下町の被害がとくに甚だしかった。火災も発生したが、風が穏やかだったこともあり、地震ほどに被害が出ていない。死者は総計で1万人ほどと推計されるが、そのほとんどが圧死であった。

(出典)『災害復興の日本史』を参考に筆者作成

安政の大地震は、複数の地震を総称している名称であること、マグニチュードが約7～7.1と推定されており、1万人余りの死者が出たことを確認した。その際、阪神・淡路大震災を事例として取り上げ、被害の大きさを比較しながら紹介した。そして、安政江戸地震後に出回った「鯰絵」を紹介した(資料2・3)。



(資料2)



(資料3)

まず、鯰絵に描かれているものを確認させた。授業では、「鯰(額に江戸、信州と書かれた鯰)、人(大工さん、お坊さん)、雷神、お店、瓢箪」が挙げられた。加えて、補足説明として鯰が地震を起こす原因と考えられていたことを改めて紹介し、「地震=鯰」として描かれていることを再確認した。その際、鹿島明神や要石の画像を用いて、地震と鯰の関係についての説明も併せて行った。そして、人々が鯰を襲っている姿から、人々が地震に寄せた思いに着目させ、発表させた。生徒からは、「人々が地震を憎んでいる」「なんてことをしてくれたんだ!という気持ち」などの発言があった。

加えて、国立歴史民俗博物館の「歴博画像データベース」および、国際日本文化研究センターの「鯰絵コレクション」の画像のいくつかをカードにして学習者に提示し、読み解かせた。そうすることで、鯰絵のモチーフがもつ多様さを生徒たちに気付かせることを目指した。続いて(資料4・5)を提示する。



(資料4)



(資料5)

資料4は、地震を具現化している鯰が人々を襲っている鯰絵である。資料4と資料2を比較させ、共通点と相違点を発表させた。共通点として、鯰やそれを恐れている人々の姿が描かれている点、相違点として、逃げ惑っている人々の表情に笑顔が見られるなど、余裕が感じられる点が挙げられた。そこで、地震が起きると、喜ぶ人・悲しむ人がいたことに気付かせた。続いて、喜んだ人（職業）とその理由を発表させた。学習者からは、「大工さん：家を建てる機会が増えたから。儲かったから」などの発言があった。その際、資料5を下記の資料とともに提示した。

あんしん要石

大きな要石に人々が手を合わせて祈っている。年寄りも長寿を、大工は仕事が増えてこなしきれないので、十人前の体を、新造は災害続きで芝居が鑑賞できないので一刻も早く興業再開できるように、瀬戸物屋は地震がある時は、事前に知らせてくれるように、芸人・吉原の人やイサミは地震がないように、医者は忙しすぎるので早く患者が直ってほしいと、各々の思惑を願っている。

『鯰絵－震災と日本文化－』 p.265 を参考に筆者作成



左図、(資料6)。

加えて、当時、民衆が地震を「地新」と言い換えて表現していたことを説明し、地震がもたらす、破壊と復興、嫌悪と崇拜、殺戮と養育といった顕著な対立の先にある、為政者による世直し・お救いを求めていることを説明した。その際、「地震と鯰の関係」「地震（地新）と世直しの関係」「地震と民衆の関係」について整理させた。

(2) 鯰絵と為政者の関係を考える（1時間）

授業の導入で、既有知識の確認を行った。具体的には、鯰絵とそこに描かれているものの確認および鯰絵と世直しについて確認を行うことで、既有知識の想起を図った。次に、「当時の人々は、なぜ地震が起

きたと考えたのだろう」と発問する。生徒からは、前時の学習内容を踏まえ、「鯰が暴れたから（と考えられていたから）」との発言があった。そして、「なぜ、鯰は暴れたのだろう」という発問を行った。そして、答えに代えて、C. アウエハントが著書『鯰絵』で述べている「天災の発生と為政者が行う政治との因果関係」を紹介し、読み解きを行った。

地震の発生と為政者に関連があった！？

天災を、人間の過ち、とりわけ口先だけの為政者による悪政やその弊害に対して、神々が下した罰と見る考えは、古代から繰り返し現れているようである。(中略) 徳川時代になってもその影響は続き、その片鱗が鯰絵のなかにも見出される。こうしたことから、いくつかの点を指摘することができる。第一に、地震が為政者—推論では政府高官を含む—に対する「天譴」つまり天のとがめとしてのみ考えられたということである。こういった考え方は、為政者とその臣下たちのとるべき「王道」という儒教的理念に発している。「王道」というのは、簡単にいえば、為政者が「自然の摂理」の維持者として、また地上でもっとも強い神権をもつ者として、人間界と自然界の調和を保持しようとする正しい行動を取るべきであるとする理念である。天譴とは、天の子(天子)が王道を踏みはずして政事を疎かにした時に下される非人道的な「咎」の1つのあらわれである。(中略) 地震と為政者の失政との関係は切っても切れないものであった。

(出典) C. アウエハント著『鯰絵』 pp.103-104 より引用

「為政者が行った悪政やその弊害に対して、神が罰として天災を下していたこと」「天災は、政事を疎かにした際に下される非人道的な「咎」である」ことを読み取らせた。また、それが表れている鯰絵を、歴博データベースおよび鯰絵コレクションから生徒自身に探させた。そして、理由とともに発表させた。その際、資料3・4の鯰絵を再度提示し、為政者(幕府)の比喩として雷神が描かれていることを紹介した。そうすることで、鯰絵に込められた為政者への気持ちに着目させた。

ここで、当時、為政者(幕府)が行った政治やその結果として存在する社会情勢について整理を行った。具体的には、ペリーが来航した後、祖法である鎖国を取り止め、開国を決断したことや、幕府の武威が失墜していたことを紹介した。そして、為政者が行った悪政とそれが原因で発生した(と思われていた)地震、地震と世直しの関係について整理を行った。

(3) 事後学習

事後学習では、その後の歴史の流れについて大まかに理解する講義型授業を行った。その際、公武合体運動や尊王攘夷運動の展開、薩長同盟や戊辰戦争を取り上げ、為政者の行った政策とその結果・影響について考察を行った。その際、「ええじゃないか」や「おかげまいり」などを紹介することで、庶民がどのように幕末を見つめ、生活をしてきたのか解説した。そうすることで、朝廷や幕府といった「上からの歴史」だけでなく、庶民を代表とする「下からの歴史」についても触れることができ、幕末という歴史を庶民・幕府・外国勢力といった視点から多角的に理解できるように工夫を行った。

5 本研究の成果と課題

本研究の成果として、諸資料から情報を読み取り、多角的に考察し、社会情勢の理解を目指す学習を行うことができた点である。『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説—地理歴史編—』の日本史探究の目標（1）においても、「諸資料から我が国の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」ことが求められている。本実践でも、これを踏まえ、複数の鯰絵や諸資料から情報を読み取り、そこから、当時の民衆が政治をどのように見ていたのかを考察する学習過程を組み込んだ。質問紙調査などを実施していないため、資料活用の技能がどこまで向上したかは不透明であるが、実践が進むにつれ、資料からより多くの情報を読み取る生徒を見て、ある程度の技能向上は図れたのではないかと考えている。加えて、今回の実践において、資料の多角的な読み取りが可能となった背景には、博物館という信頼できる施設が良質な資料を、ホームページで公開しているという条件が整ったことにも留意したい。

一方で、課題として、時代の転換に関する学習が不十分であった点が挙げられる。本実践では、「鯰絵」に着目し為政者・民衆の気持ちなどを読み取らせ、時代の転換までを理解することを目指した。しかし、幕末の社会情勢や民衆の気持ちなどは、鯰絵や関連資料から生徒が主体となってある程度類推できたものの、それ以降の歴史についての学習がおろそかになってしまった。また、事後学習に関しては、教員の講義型授業が中心になったこともあり、生徒が主体的に探究する場を設けることができなかったことも課題として残った。

今後の展望としては、生徒が主体となって、社会的事象の理解や知識の獲得を目指す過程で、結果として、時代の転換や社会のしくみなどの理解に繋がるような学習過程の開発を行っていきたい。また、今回の博物館との連携を一過性のものとせず、継続して行っていく点が挙げられる。その際、国立歴史民俗博物館はもちろんのこと、近隣の博物館との連携を図ることで、地域資料の活用も積極的に図っていきたい。

6 さいごに

本研究では、鯰絵に込められた「為政者・民衆の気持ち」や「地震」、「世直し」というキーワードに着目させ、当時の社会情勢および近世から近代への時代の転換の理解を目指した授業実践について紹介した。筆者が国立歴史民俗博物館の博学連携研究員を拝命した 2019 年度～2020 年度は、新型コロナウイルス（COVID-19）が猛威を振るった時期である。2020 年 4 月には新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言が発令され、多く学校が休校措置をとった。筆者の勤務校においても、4 月～6 月中旬までの休校が決まり、休校期間中は ZOOM を活用したオンライン授業の充実が図られた。また、感染拡大に伴い、「ウィズコロナ」という新たな生活様式が提案され、社会の在り方も少しずつ変化しているように感じる。そのような社会情勢を受け、博学連携も大きなターニングポイントにあると考えている。来館型中心の連携だけでなく、ホームページにあるコンテンツの活用や所蔵資料の貸し出しを受けるといった、非来館型の博学連携の充実を図っていくことで、研究・実践の裾野が広がっていくと考えている。本研究がその一助になれば望外の喜びである。

【謝辞】

本研究を行うにあたり、国立歴史民俗博物館広報サービス室の学校対応の方々にはアドバイス、資料提供などをいただきました。また、クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパスの河邊文宏氏、石川眞椰氏にお世話になりました。末筆ながら

御礼申し上げます。

【註釈】

- 1) 『日本史大事典』第5巻 p.405 より引用
- 2) 宮田登・高田衛 (編) 『鯨絵－震災と日本文化－』 p.116 より引用
- 3) 前掲書 p.118 を参照
- 4) C. アウエハント 『鯨絵』 p.103 より引用
- 5) 前掲書 pp.103-104 より引用

【参考文献】

- ・一場郁夫 2014 「博学連携による博物館学習の推進－博物館と学校との実質的な連携による推進体制の構築について－」
『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第18号、日本ミュージアム・マネジメント学会、pp.51-57
- ・石隈聡美 2015 「鯨絵と板元」『國學院雑誌』 pp.21-48 國學院大學
- ・岩下志麻 2018 『「民衆心理」から社会のしくみの認識を目指す中学校歴史授業の開発－小単元「幕府政治の揺らぎとお救いへの不満」を事例に－』兵庫教育大学大学院修士論文
- ・大久保純一 2016 「幕末・明治の出版にみる災害表象－風景表現を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第203集
- ・門松秀樹 2014 『明治維新と幕臣』中央公論新社
- ・久住真也 2018 『王政復古－天皇と将軍の明治維新－』講談社
- ・土田宏成 2013 「描かれた江戸の大地震－安政江戸地震と鯨絵を読み解く」『神田外語大学日本研究所紀要』第5巻 pp.58-65 神田外語大学日本研究所
- ・奈良勝司 2018 『明治維新をとらえ直す－非「国民」的アプローチから再考する変革の姿』有志舎
- ・西川武臣 2016 『ペリー来航』中央公論新社
- ・畑中章宏 2017 『天災と日本人－地震・洪水・噴火の民俗学』筑摩書房
- ・藤田覚 2015 『幕末から維新へ』岩波書店
- ・福田周 2014 「鯨絵にみる震災体験の心理的関与によるイメージ化過程」『死生学年報』 pp.207-236 リトン
- ・村松彩乃 2008 「鯨絵研究」『哲学会誌』第32巻 pp.135-162 学習院大学
- ・森下みさ子 1995 「災害と想像力－「鯨絵」の向う側で－」『幼児の教育』第94巻9号 pp.24-27 日本幼稚園協会
- ・宮田登・高田衛 (監) 1997 『鯨絵－震災と日本文化－』里文出版
- ・安田政彦 2013 『災害復興の日本史』吉川弘文館
- ・渡部竜也 2019 『主権者教育論－学校カリキュラム・学力・教師』春風社
- ・C. アウエハント 2013 『鯨絵－民俗的想像力の世界』岩波書店 (訳者：小松和彦、中沢新一、飯島吉晴、古家信平)
- ・神奈川県立歴史博物館(編)2012 『ペリーの顔・貌・カオ－「黒船」の使者の虚像と実像－』神奈川県立歴史博物館
- ・国立歴史民俗博物館(編)2019 『学校と歴博をつなぐ－平成29・30年度博学連携研究会議実践報告書－』国立歴史民俗博物館
- ・下中弘 (編) 1993 『日本史大事典』第5巻、平凡社
- ・文部科学省 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説－地理歴史編－』
- ・国際日本文化研究センター 「鯨絵コレクション」 (最終確認 2021年1月24日)
<http://shinku.nichibun.ac.jp/namazu/ichiran.php>
- ・国立歴史民俗博物館 「歴博画像データベース」 (最終確認 2021年1月24日)
https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/syuz2/db_param